



秋の夕日に照る山 紅葉  
濃いも薄いも 数ある中に  
松をいろどる 楓や蔦は  
山のふもとの 裾模様  
『紅葉』(小学校唱歌) 明治四十  
四年

秋がきて、山も森も緑が薄れて  
ゆく。我が家の、ゆるりらの森  
もチラチラ紅く色づきはじめて、  
朝日、夕日に照らされると口ずさ  
む唄は頭書の「紅葉」なのだ。し  
かし、なぜか今年は、例年に比べ  
て、美しさが不足しているようだ。  
天候不順で太陽の出方が少なかっ  
たからなのだろう。中標津に移住  
して、丸七年になるけど、今年の  
ようなおかしな気候は初めてで  
あった。

、十月の北海道は最高なのだ  
と想っていた初っ端の一日。スゴ

イ台風がきちゃった。風速四十km/h  
の暴風雨、大切にしている庭の  
大っきい樹が今にも折れそつで八  
ラハラして見ていたが、頑張って  
くれて助かった。ホツとした。そ  
して台風一過のいい天気。久しぶ  
りに芝刈り機でひと汗かいて、  
刈ったあとの枯草を竹ぼうきで集  
めていたとき、背中のピッコロ川  
のクレソンがポチャツと音がして  
る。誰かが小石でも投げ込んだの  
かな、と振り返ってあつちこつち  
を見回したが、子どもも誰もきて  
いる様子がない。大っきい枯れ木  
でも飛んできたんだらうと思ひ、  
それっきり忘れていた。隣の阿部  
チャンがきて、十月二十日(日)に別  
海自衛隊で、もつと、北海道を  
帯広からくる第五音楽隊の演奏で  
唄うことになった打ち合わせをし

ながら、なんの気なしに、  
「阿部チャン！さつき庭の芝刈つ  
てたとき、あのクレソンのとこで  
ポチャツと音したけど魚でもいる  
んだべかなア…」  
「うん…？それ、シャケだわ…」  
で、飛び出していった。  
私は家内と笑いながら、  
「まさかア。あんな小つちやい川  
に鮭が上るわけないべや」  
で、囲碁を打ってたら、裏の台  
所の入り口でドンドンと戸を叩く  
音。  
「アラ、阿部チャン、どうしたの？」  
「先生！シャケだア！何匹も上つ  
てきてるわ。見に行くかい？」  
「ホ、ホントかア…。行く、行くウ」  
二人でゴルフ用カートに飛び  
乗って下のピッコロ川まで急行し  
た。なんと、クレソンの生え繁つ

ている隙間に、大っきいシャケが  
二匹、バシャンバシャンと跳ねて  
いるではないか。  
「ウワア…。阿部チャン！これ、  
雄か雌かア…。筋子、腹に入つて  
るのかア？」  
「入ってるよ。スゲエ太てえモン」  
「二、三匹、獲ってみるべや。筋  
子、食べるんでないかよ！」  
「駄目だア。獲ったら密漁になる  
んだわ」  
「なんでよ！俺の庭に入ってきた  
鮭でも獲ったら駄目かよ」  
「法律で決まってるんだモンな」  
「不法侵入は、アメリカじゃ鉄砲  
で打ち殺しても仕方ねエことにな  
ってるんだけどなア…。日本じゃ  
駄目かア…」  
それにしても、驚いたなア。小つ  
ちやいイワナとかヤマベならわか  
るけど、体長一尺もある鮭が数十  
匹も上つてきてるのだ。近づいて  
のぞくと、一応はバシャンと音を  
立てて逃げるのだが、川幅が一尺  
もないところだ。クレソンの下に  
隠れても、頭隠して尻隠さず、で、  
尻尾が丸見えである。  
「かわいいもんだなア…」  
やつぱり、獲る気にはならな  
かった。

こんなに上つてきた鮭は、この後、どうなっちゃうのかが心配になった。鮭のことに詳しい、標津役場の水産課長、川口君にさっそく電話で聞いてみた。

「真！俺なりに、シャケ、ガツポリ上つてきたのよ！これから、どうなっちゃうんだべ」

「へエー。あんなとこまで上つていきましたかア。(笑いながら) そりゃあ、そのシャケ、エリートだわ。ずいぶんと頑張つて上つてんだもんねえ」

「そのエリートたち、どうなっちゃうのよ！」



「さ」ッコロ川をのぼる鮭

「そこで産卵して、みんな死んでくでしょ。心配ありません。ちゃんと残骸はキタキツネやカラス、オジロワシがきれいに片付けてくれますよ。それが自然現象。いい森になりますわ…」

羅臼観光協会長の阿保君にも話したら、笑いながら、

「そりゃ、エリートじゃなくて、変わつてるんだわ。先生みたいな変わつた人のとこへ行きたかつたんでないかい？」

と、きたもんだ。少し川下へ行ってみると、二、三匹のシャケが産卵するための行為なんだろう、川底の砂利を尾ひれを使って調整している。そのすぐ側に、もう産卵したあとなのだろう、死んで動かなくなったシャケが小岩の陰に横たわっていた。もうすでに、大仕事を終えた鮭が安らかに眠っていると思うと、なんだかこのシャケたちが可哀相になっちゃった。

「阿部チャン！このシャケたちはあと、何日ぐらい生きてんのかなア…」

「いいとこ、一週間かな。だんだん元気なくなつて死ぬんだわ」

「そつかア…。そつとしいてやるべや」

「わかった。そうするべ」

あれから一週間。三匹のシャケが死んで横たわっている。

思えば、三年ほど前だった。オジロワシが、なにかを引き上げて食べているところを、窓から双眼鏡で見たことを思い出した。あれは、きつと産卵したあとのシャケだったのだ。そのときに生まれた子どもが、四年の長旅を終えて、この故郷に戻ってきたのかもしれぬのだ。

「シャケ君たち。よく頑張つたなあ…。ご苦労さん！」

心の中で、死んでいるシャケたちに声をかけたら涙が出ちゃった。これからは、鮭を食うたびに感謝の気持ちが出ることだろう。まったく、中標津に移住してよかった。九月二十五日。もつと、北海道のCDがやつと発売の運びに漕ぎつけた。発売、第一回発表会を『しべつあきあじまつり』の会場でやらせてもらった。九月三日には、札幌ドームで一万人以上の観客の前で『道新・もつと北海道フェア』のオープニングセレモニーをやつたし、『大地のど自慢』でも披露したから第三回目となるわけだが、CD発売記念としては第一回目な

のである。会場は標津町サーモン科学館広場の屋外ステージ。昨夜から急に雨が降りはじめたので、お客さんがきてくれるかが心配だ。祭り実行委員の関係者はもつとじつとしていられないことだろう。朝になって降り方がますます激しくなつた。今日の発表のために、札幌から観音由布美君という歌手も、昨日からトーヨーグランドホテルに泊まっていたが、この天候にはガツクリしている。なんせ、大事な舞台衣裳が雨ざらしになつちゃあ大損害を受ける。私たちが出演する時間は十二時ちょうどとなつていた。雨であろうと、風であろうと今日の出演を止めることはできない。一カ月前からポスターにも印刷してあった。十時からの一般入場も二十分繰り上げて客を入れていた。

家内の運転する車で、私と阿部チャンと観音君が到着した十時には、無償サービスのイクラ丼をもらおうと、大勢の客が雨の中に列を作っていた。

「天気予報で、昼頃には雨は上がるっていつてたわよ。少し小降りになつてきたみたい」

家内が空を見上げていった。

「ホントかい。ちっとも雨も風も変わってこないべや。お客さんも可哀相になア…。俺、足、グシャグシャだよ」

「なんせ、雪駄に足袋なので、会場の芝生のビシャビシャが、すっかりしみ込んでしまった。それでも、十時からは予定通りの進行で雨の中でも、さすが評判の『しべつあきあじまつり』は大盛況。元気のいい「標津とどわら太鼓」のあと、もつと、北海道の披露である。ところが、驚いたことに雨が上がったのだ。なんと、この運の良さ。私も張り切っちゃった。



『しべつあきあじまつり』の会場でもつと、北海道を発表

ステージに登って、二人の歌い手（阿部チャンと観音君）に合わせ掛け声。司会までやって、もつと、北海道の宣伝を精一杯しゃべらせてもらった。

「みなさん！この「もつと、北海道 いっしょよー！」

「いい唄だよ」

「みんなで覚えて、唄って、元気になつてやア…」

阿部チャンのところへ、タラバガニの差し入れまであつて、楽しく素晴らしい発表会になつちゃった。まったく、運命の不思議さは想像つくものではない。まして、天候など天気予報の通りにならないのが当たり前のように。世の中の情勢も天候と同じで明日なにか起こるか知れたもんじゃない。

今朝も郵便受けに昨日の夕刊（当幌は一日遅れてくる）と、旧制中学校同窓会の通知が入っていた。私は中学を三回も変わっているのだが、いつの間にか三校とも同窓会の名簿に入っている。樺太（現サハリン）の真岡中学校、札幌第二中学校、樺太恵須取中学校の順に転校して、最後が樺太最北端の恵須取という町で卒業、その翌年に敗戦を迎え、ソ連軍に抑留

されて、一九四一年に引き揚げてきた。たしかに三校とも通っていたし、結構、部活動で騒いでいたから、校内でもちよつと名前は知られていた。それに、自分じゃそれほど悪じゃなかったと思っていたが、先生方から不良扱いされたのが、同級生、下級生には兄貴分と一目置かれたようだ。

そのせいか、東京の銀座でスナックをやっていた頃は、よく同級生が、誰から聞いたのか訪ねてきてくれた。友人たちは、みんな私のことはよく調べているらしいが、私の方は、どこの中学で一緒だったのか覚えていない。友人や部下を連れて入ってくるなり、

「おお、牧！（私はこう呼ばれていた）しばらくだなア。友だちと会社の仲間を連れてきたぞオー。オイツ、みんな。俺の親友、牧野だア」

「……？（誰だったっけエ）」  
であつたけど、彼をがっかりさせては可哀相なので、  
「おお、しばらく。元気だったかア……」

この後、いろいろ話ながら、「ああ、札幌二中時代だったかア」と納得していた。まだ、四十年代、五

十年代はよかつた。六十代からは、会つても話が同じことばかり。そして、みんな年を取っちゃつて、同窓会へ行つても老人会で、病氣の話ばかりと、昔の思い出だけである。なにか、淋しくて暗くなる。そして会話の中でも

「おい、今年は吉田、こないのかア？」

「ああ、あいつ、先月死んだわ」

「フン。そうかい……」

だけで、大して驚かなくなつてしまった。こんな具合になつたら会わない方がいいと思うので、私は七十歳を過ぎてからの同窓会には出席しないことにしている。

今回も、御出席・御欠席、に丸をつけて送れとのハガキは、欠席として出した。

私は、今日から明日のことを大事に、精一杯元気に楽しく、そして私のことをいつも気にかけてくれる、やさしい女房と暮らしていくのでーす。